

吉備国際大学研究紀要

(人文・社会科学系)

第27号, 29-38, 2017

私立保育園における英語活動の実践事例

秀 真一郎*・志濃原亜美**・小野 克志***・木本 有香****・田中 卓也*****・
中島 眞吾*****・横井 一之*****・烏田 直哉*****

A Practice of English Activities at Private Nursery School

Shinichiro HIDE, Ami SHINOHARA, Katsushi ONO, Yuka KIMOTO, Takuya TANAKA,
Shingo NAKASHIMA, Kazuyuki YOKOI, Naoya KARASUDA

Abstract

The purpose of this paper is to clarify a practice of English activities in a nursery school. This paper showed that the children seemed to feel familiar with English because of the teacher. English activities in this nursery school will be marked by the point that it's effective for the children to feel affinity towards English.

Key words : Nursery School, English Activities, Example of Practice

キーワード : 保育所、英語活動、実践例

-
- * 吉備国際大学心理学部
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
Kibi International University
8, Iga-machi Takahashi, Okayama, Japan(716-8508)
- ** 秋草学園短期大学幼児教育学科
〒359-1112 埼玉県所沢市泉町1789
Akikusa Gakuen Junior College
1789, Izumi-cho, Tokorozawa, Saitama, Japan(359-1112)
- *** 名古屋文化学園保育専門学校
〒461-0011 愛知県名古屋市東区白壁一丁目54
Nagoya Bunka Gakuen Nursery and Kindergarten Teachers College
1-54, Shirakabe, Higashi-ku, Nagoya, Aichi, Japan(461-0011)
- **** 同朋大学社会福祉学部
〒453-8540 愛知県名古屋市中村区稲葉地町7-1
Doho University
7-1, Inabaji-cho, Nakamura-ku, Nagoya, Aichi, Japan(453-8540)
- ***** 共栄大学教育学部
〒344-0051 埼玉県春日部市内牧4158
Kyoei University
4158, Uchimaki, Kasukabe, Saitama, Japan(344-0051)
- ***** 中部大学
〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地
Chubu University
1200, Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi, Japan(487-8501)
- ***** 東海学園大学教育学部
〒468-8514 愛知県名古屋市天白区中平二丁目901
Tokai Gakuen University
2-901, Nakahira, Tempaku-ku, Nagoya, Aichi, Japan(468-8514)

はじめに

本稿の目的は、幼児教育現場における英語活動の実践を明らかにすることである^{註1)}。その事例として私立保育園における「英語あそび」の活動事例を示す。

平成25年12月、文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が示された。小学校中学年においては「活動型」とし、学級担任を中心に指導、高学年においては、「教科型」とし、専科教員による初歩的な英語運用能力を養うとしている。今後「学習指導要領を改訂し、2018年度から段階的に先行実施」する意向である。これにさきがけ、「英語教育の在り方に関する有識者会議」を設置し、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を見据えた英語教育改革について検討を進めている^{註2)}。このような流れの後、平成28年12月には、中央教育審議会より、次期学習指導要領に向けた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」が答申され、小学校における外国語活動を3・4年生に前倒しし、5・6年生においては教科とすることとなった。

以上のように、小学校以上の学校教育において、「国際的な労働市場で活躍できる人材の育成」^{註3)}が強調される一方で、幼児教育現場では、それ以前から英語を取り入れていた事例も認められる^{註4)}。現在では、多くの幼児教育現場で英語活動が取り入れられている。幼児教育現場における英語活動の方法や内容は「百園百様」であり、多くの調査が行われてきた。大別してみると、早期教育の是非を問うもの、あるいは心理学的側面から、実践事例などが挙げられる。教育心理学の分野においては、英語音韻を把握する幼児の能力に関する研究成果がある。湯澤正通らは、私立保育園の日本語を母語とする幼児を対象に、英語の構成音素の知覚・発声能力を調べ、またその能力が英単語反復の難しさと関連しているということを示した^{註5)}。この中で、年齢による音声知覚の違いを示しているが、3・4歳児に比べ5・6歳児は英語の子音をより正確に反

復できると指摘している。事例研究としては以下の研究があげられる。中山千章らは、平成21年度のつくば国際短期大学附属幼稚園年長児における英語カリキュラムを提示している^{註6)}。月別の具体的なカリキュラムが示してあり、最大のねらいとしては「子どもに英語を楽しんでもらえるようにすること」としている。また、松永道子らは「日本幼年教育会加盟および佐世保市内幼稚園・保育園」を対象に、英語教育導入の有無、目的、対象クラス、時間数等を調査している^{註7)}。回答の得られた91園のうち、67園、ほぼ4分の3において実施されているとしている。また、この調査において、指導者は41%が「ネイティブの先生（派遣講師）」であり、「英語を母国語としない英語担当の自園の職」はごく少数である点は興味深い。

本稿で取り上げる私立保育園においては、英語を母国語としない前園長が「英語あそび」を年長児に対して実施している。

1. 調査対象および方法

調査対象とした保育所の概要および指導者について述べる。対象とした保育所はN市S区のK保育園である。昭和12年9月1日に開設され、戦後にいたり昭和23年4月、児童福祉法施行により認可された保育所である。定員は120名であり、平成27年度現在、133名の園児が在籍している（【表1】参照）。

【表1】入所児数

年齢区分 性別	年齢						合計
	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	
男児	7	8	9	15	16	15	70
女児	4	9	9	14	13	14	63
合計	11	17	18	29	29	29	133

(K保育園編「平成27年度 事業概要」、5頁より。)

指導者は通訳案内士（英語）として活躍する一方で、園長（平成11年より）在職時より、保護者の要望に応

じて、中学校教諭(英語)の素養を活かし、「英語あそび」を導入した。平成26年度においては、週1回、1時間程度、年長クラスを対象に活動して実施した。年に2回、保護者が参観する機会が設けられている。12時30分から14時の「あそび」の時間の中で実施されている。

きっかけは、保護者からの「子どもを英語教室に行かせたいが、忙しくて出来ないので、保育園でなんとか出来ないか」との要望である。このような要望と、指導者の素養とが一致した。

平成27年1月16日(金)および平成27年3月6日(金)(平成26年度計36回中の34回目の「英語あそび」、13時～14時)の2回にわたり観察を行った。本稿では、後者の「英語あそび」について、その内容を示す。

2. 「英語あそび」のねらい等

「英語発音の反復練習や文字の練習」よりも「楽しく自然に英語に親しめる」こと、英語嫌いにさせないようにすることに重点をおいている^{註8)}。以下、「英語あそび」のねらいや具体的方法について述べる。

(1)ねらい

指導者がねらいとして考えているのは、以下の資料に示されているとおり、「楽しく自然に英語に親しむ」ことである^{註9)}。母語を習得するように、「感覚的に」英語にふれることをねらいとしている。

「楽しく自然に英語に親しめる」→生まれたばかりの乳児が母語を覚えるプロセスのようなことを楽しく経験させ、感覚的に英語に慣れさせる。これをもう少し分析し、具体的に言えば

① 自分の身の回りで話されている言葉を一生懸命聞く。

↓

② 何度も聞いた言葉を意味が分からないまま真似て発音する。

↓

③ その言葉の意味を理解して言われた物を指

差したり、動作をする。

+

④ 上記①～③を十分行なうと、子どもは自分から意味のある言葉を言い、行動するようになる。

(2)発達段階の特徴

また、指導者は発達段階に応じた「英語あそび」の留意点として以下の諸点を示している。

① 具体的なものに反応する。目の前にある物、絵・写真・イラストに描かれた物を認識したり、歩く、走る、手を叩くなどの身体を動かす動作を模倣することができる。

② 抽象的な事物、例えば数字、アルファベットのようなものに対する反応は、知的機能が未発達のため、まだまだできない。

③ 8歳くらいまでは音に対する感覚が鋭敏で様々な音を聞き分け、その音感を記憶し、成人後もその感覚を保持できる。

「発達段階の特徴」として、「具体的なものに反応する。目の前にある物、絵・写真・イラストに描かれた物を認識したり、歩く、走る、手を叩くなどの身体を動かす動作を模倣することができる」とし、感覚に訴えるもの(目に見えるもの)を認識しやすく、また直感的な動作を表出できるものと捉えている。したがって、「抽象的な事物、例えば数字、アルファベットのようなものに対する反応は、知的機能が未発達のため、まだまだできない」ため、幼児期の英語としては相応しくないと考えているのである。

(3)指導方法

一方で、上に示した資料にあるように、「8歳くらいまでは音に対する感覚が鋭敏で様々な音を聞き分け、その音感を記憶し、成人後もその感覚を保持できる」という特性を活かしている。指導方法として、「子が感覚的に楽しいと思うようにするため」、以下の方法を取り入れている。

音感

英語特有の音調やリズムを持つマザーグース、英語学習用の歌、チャンツのCDをよく聴き、教師と共に繰り返す。但し強制はしない。

具体物

身の回りの物や興味のある物、例 果物、オヤツ、家具、文房具、動物、乗り物等の実物やイラストのカードを見せて、子等がその英語名を知っている物は言わせ、知らない物は教師が言って共に繰り返す。(強制はしない)

身体を動かす

基本動作のジェスチャー指導とジェスチャーゲーム：歩く、走る、立つ、座るなどの動作を、教師がやって見せたり、音楽CD付きのイラストを見たり聞きながら、子と共にジェスチャーする。ある程度子が覚えてきたら教師がジェスチャーをして子に英語で答えさせたり、1人の園児にジェスチャーをさせ、他の子に英語で答えさせる。

一生懸命聞く

塗り絵：子が教師の英語を注意深く聞くようにするため、児童の好きな塗り絵で、何を・何処を・何色で塗るかという教師の英語の指示を何回も聞かせる。子は塗り絵をしたいので、無意識のうちに教師の英語を集中して聞くようになる。また教師は子の反応を見て理解の

程度を判断する。

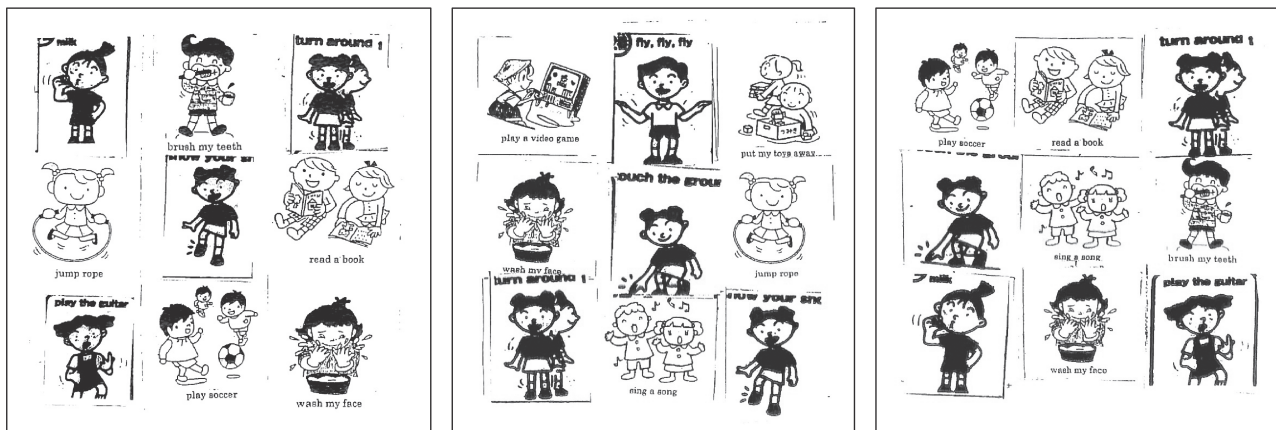
ビンゴ：ビンゴも児童が大好きなゲームなので、これを利用して子が意識せずに教師の英語を注意深く聞くようにする。

(4)教材

上記(3)に示した指導方法を具現化するため、指導者は次のような教材を掲げている。まず、「音感」を養うこと、「身体を動かす」ことを達成する教材としての音楽CDである。また、「具体物」を示す教材としては、黒板掲示用のイラストを用いる(後掲)。拡大コピーをして保育室後方の園児でも見えやすいように配慮している。また、蛍光ペンで色を塗ることにより、迫力が増し園児の注目を促す。そして、何より重要な教材は、教師自身の言葉や動作である。指導者は「これも教材のひとつとすれば、これが最も親しみと迫力がある方法である」としている。注目できる点は、指導者に「英語の発音、リズム、イントネーションについての確かな能力」を求めている点である。上述した発達段階にある、「音感を記憶し、成人後もその感覚を保持できる」という特性を考慮すればこそ、子どもの耳に確かな発音やイントネーションを届けたい、という意図を汲み取ることができる。

(5)留意事項

最後に、次の三点を留意事項として考えている。



【図1】BINGOカード

一点目は「英語遊びの目的の再確認」^{註10)}である。すなわち、「将来英語が必要となって、本格的に英語をマスターしようとするときに求められる基礎的能力である英語の音感・音調を身に付ける」^{註11)}ことを目的として位置づけている。将来に向けた実用性を考え、そのための音感や音調を基礎的能力と考えているのである。一定の実用性を重視しつつも、あくまで感覚的要素を主眼においている。

二点目は、指導者が言う、以下のような「発達段階に関する留意」である。

ア 目に見える物を見せたり、実際に具体的な動作をして教える。

イ 発音については決して強制的な繰り返しはせず、CDあるいは教師の発音を繰り返し聞かせる。(これは児童にとっては単調でつまらないので自ら進んで聞くようにさせる工夫が必要となる。)

ウ 積極的に聞かせる方法

i) リズミカルな曲やチャンツを手拍子や簡単なジェスチャーをしながら聞かせる

ii) 塗り絵、ビンゴ、教師と児童とのQ&Aなど

まず、目に見える物を見せる、具体的な動作をするなど、視覚に訴えることを挙げている。また、発音について、強制的に繰り返させるのではなく、CDや指導者の発音を何度も聞かせることを重視している。発達段階上、視覚と聴覚に訴えるよう考慮しているのである。また、単に聞かせるのではなく、「リズミカルな曲やチャンツを手拍子や簡単なジェスチャーをしながら聞かせる」、「塗り絵、ビンゴ、教師と児童とのQ&Aなど」、音楽や動作を通して子どもが能動的に聞くことに配慮している。

三点目は「対象児童数による制約」である。指導者は、「語学指導の対象人数は、4～5人から多くて8～10人が理想的である」と考えている。しかし、本実践においては、30人規模で行うため、「マンツーマンの指導や

室内を動き回るゲーム遊びは時間的、空間的に困難である」としている。したがって一斉指導が多くなるが、しかし、ビンゴゲームなどを取り入れることにより、「少人数より多人数の方が互いに競い合って、より楽しめる」として、クラスサイズを活かしている。

3. 活動概要

では次に、これまで示したねらいや指導方法が、どのような形で実践されたのかについて検討する。活動の流れとして【表2】を示し、【表2】中の【写真】はそれぞれの時点の様子である^{註12)}。

まず、インフルエンザや風邪にかかっていないか、「気をつけようね」(Be careful.)などと、英語と日本語で呼びかける。次に指導者が「英語あそびをするときのお約束を思い出してみよう」と言って、「静かに」(Be quiet.)、「先生をみて」(Look at me.)などをジェスチャーで示し、児童に英語で言わせる。続いて、「晴れ」、「曇り」などの天気之歌を、黒板のイラストを見ながら、子どもと指導者がともにCDに合わせて歌う。その後、子どもが反復する。

次に、日常基本動作のイラストを黒板に貼り、それを歌い込んだCDに合わせて指導者と児童がいっしょに歌って踊る。その後、指導者が動作をしながら、「What am I doing?」と子どもとQ&Aを行い、次に子ども同士でQ&Aを行うよう指導者が指示する。

それに続くビンゴゲームは、次のような手順で進められた。まず、9つの身体動作、あるいは果物や野菜などの絵を組み合わせた「ビンゴカード」を配付し、指導者の英語の発音をしっかり聞かせる(図は身体動作を表したもの)。その動き、野菜や果物が自分のカードにあれば子どもたちが各自のカードに○印をつける(【写真8】参照)。9つの絵の組合せは一人ずつ少しずつ変えてあり、ゲームを盛り上げるよう配慮してある。指導者は、指導方法の留意点として、以下の通り述べている^{註13)}。

- a. ビンゴをする前にビンゴに出てくる物の名、動作などを教師が、「これはビンゴに出てくるよ」と言って説明すると、子等はゲームに勝ちたいので一生懸命覚えようとする
- b. ゲーム中、教師はヒントを3回以上繰り返し、児童が十分聞けるようにする。
- c. ビンゴの絵の組み合わせを少しずつ変えると、周りの子と絵が異なるため競争意識が芽生えゲームが一層盛り上がる。
- d. ビンゴの後半、まだ○印の付いていないものを子に英語で言わせると、その子は上記「ねらい」の④の段階に達する、即ちその単語の意味を理解し、自ら発する、ということになる。

以上のような活動を通して、おおよそ1時間の「英語あそび」が終了する。

この活動から次の点を指摘できる。まず一点目に、指導者がほとんど日本語を使用していないという点である。補足的に日本語で説明を加えるのみであり、子どもたちは聴覚から多くの英語を取り入れることができる。二点目に注目したいのは、子どもたちが指導者の動きを見る、子ども自身も体を動かす、手を動かすなどを通して、聴覚だけでなく身体全体の感覚を使って英語を取り入れ、表現しているという点である。上に示したように、子どもが「音感を記憶し、成人後もその感覚を保持できる」というねらいを具現化しているものと言えよう。三点目に、ほぼ1時間という、幼児

【表2】活動の流れ

時間	指導者	配慮事項等
13:05～	Good afternoon! Hi, everybody. How are you?	“I’m fine, thank you. And you?”と子どもたちが答える。それに対して、“I’m fine too, thank you.”と教師が応ずる。
	Look outside. How is the weather today?	sunny, cloudy, rainy
	Let’s remember the promises at class. What’s this?(in gesture)	Be quiet. 【写真1】 / Listen to me. / Look at me. / Look at the board.
	First of all, let’s sing “Do Re Mi”. You’ve done a good job at the Music Day last week.	「遊戯会でドレミの歌を上手に歌ったね。」
13:10～	Today we are going to sing the songs we’ve learned so far.	「これまでに覚えた歌を歌いましょう。」
	①歌 “Say Hello” (♪close your eyes～【写真2】)	
	②Action colors (色別のカードを黒板に貼る。【写真3】)	
	③歌 “Swimming Swimming”	‘Fancy diving’の時ふざけてぶつからないよう注意する。
	④歌 “Head, Shoulders, Knees and Toes”	
	⑤歌 “Open Shut Them” (Put them on your “Where”と問いかける。)	
13:30～	⑥What’s in the cart? (黒板にカートを書き、歌に合わせてカードを黒板に貼る。【写真4】)	
	Let’s remember the names of fruit and vegetables.	果物・野菜のカードを1枚ずつ “What’s this?” とQ&Aをしながら黒板に貼る。【写真5】
	Let’s do BINGO of Names of fruit and vegetables. First let’s sing the song of BINGO.	果物と野菜のビンゴをしよう。 まずビンゴの歌を歌おう。【写真6】
13:40～	Let’s begin BINGO.	
	“What’s in the cart?”の歌を歌いながらやりましょう。	まず教師が “Teacher takes an apple.”と歌いながらリンゴのカードを黒板に描いたカートに貼り付ける。更に同じ要領で2～3枚行う。【写真7】【写真8】
	Now it’s your turn. What do you want to take? Raise your hand.	今度は皆の番だよ。何のカードを取りたいの。手を上げて。
	Say that in English.	指名してその物を英語で言わせる。教師はその物のカードを取り、「○○君takes△△」と歌いながらカードを黒板に貼る。

(Katsuhiko Masaki(2015) “Let’s Play in English ’14-34, March 6, 2015”より。一部文言を変更。)



【写真1】“Be quiet.”



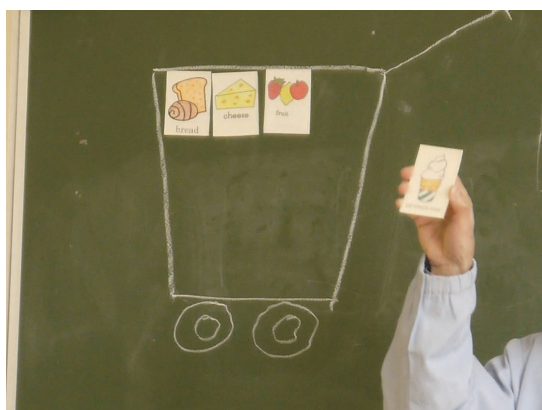
【写真2】“♪close your eyes～”



【写真3】“Action colors”



【写真4】“What's in the cart?”



【写真5】“What's this?.”



【写真6】“Let's sing the song of BINGO”



【写真7】カードの貼り付け



【写真8】BINGO カード

にとっては長い時間、興味を保持しているという点である。二点目に挙げた、感覚に訴える活動、また、工夫された教材がそれを可能にしているものと考えることができる。

おわりに

本稿で明らかにした「英語あそび」の特質について、以下の諸点を指摘できよう。

一点目は、ねらいの明確化である。最終的な目的は、「将来英語が必要となって、本格的に英語をマスターしようとするときに求められる基礎的能力である英語の音感・音調を身に付ける」ことと明確にされている。必要に迫られたときに生きる英語の音感や音調を養うことを目的としている。

二点目は、発達段階に対して考慮されている点である。発達段階を考慮した上記のねらいのもと、それに対応した指導方法と教材を用いている。現在の指導方法、教材に至るまでには試行錯誤を繰り返した。抽象的な、数字やアルファベットには多くの子が興味を示さないので、身のまわりの事物や身体の動作を示す。また、強制をしない、無理強いをしないことを重視している。集中して英語に耳を傾けさせるために、塗り絵やBINGOゲームを取り入れるなどの工夫がなされている。

三点目は、教材化する際の工夫である。CDなど既存

の素材を用いつつも、「自分の英語で子どもたちに語りかける」ことが重要であるとの考えに基づき、「教師自身の言葉、動作も教材のひとつとすれば、これが最も親しみと迫力がある方法」としている。したがって、「教師は英語の発音、リズム、イントネーションについての確かな能力が求められる」としている。

四点目は、自園関係者による英語活動のメリットである。先行研究においても指摘されている通り、外部委託による英語活動が多く行われる中、自園関係者が自ら英語活動を展開する例は少ない。園の特徴や子どもの実態をじゅうぶんに把握している自園関係者だからこそ可能な「英語あそび」であると言えよう。また、週1回ではあるが、保育日課の中での英語活動であり、じゅうぶんな時間と内容の確保、指導の継続性が高いと考えられる。

活動前に、「Please come on, Mr. Masaki!!」と、子どもが職員室にいる指導者を呼びに来ることがきまりとなっている。子どもたちにとって身近な存在が、指導者であり、英語への親近感を高めるにも効果的であるという点に当園の活動が特徴付けられよう。

【謝辞】本稿を執筆するにあたり、指導に当たられたK保育園前園長先生、園長先生、および同園職員の方々に御教示を頂きました。ここに御礼申し上げます。

註

- ¹⁾ 本稿は、日本保育学会第68回大会（平成27年5月9日、於椋山女学園大学星が丘キャンパス）ポスター発表「多文化教育・異文化理解・ジェンダーなど」部会で報告した、「幼稚園・保育所における英語活動の実践（1）— 私立保育所における活動事例—」に、加筆してまとめたものである。
- ²⁾ 英語教育の在り方に関する有識者会議「議事録」〔平成26年、第1回（平成26年2月26日）より第9回（平成26年9月26日）まで（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/index.htm：平成28年12月23日閲覧）〕および、中央教育審議会「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（諮問）」（平成26年7月29日、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1350537.htm：平成28年12月23日閲覧）参照。
- ³⁾ 前掲註2）「子供の発達や学習者の意欲・能力等に応じた柔軟かつ効果的な教育システムの構築について（諮問）」参照。
- ⁴⁾ 古くは大正期の「英語遊戯会」によって「幼児に英語を教へる」活動が確認できる（ある保姆「神戸に生れた英語遊戯会について」『幼児教育』21(3)、日本幼稚園協会、大正10年、101-104頁参照）。
- ⁵⁾ 湯澤正通・関口道彦・李思嫻・湯澤美紀「日本人幼児における英語構成音素の知覚と発声」『教育心理学研究』第59巻第4号、2011年、441-449頁。
- ⁶⁾ 中山千章・廣瀬久子「幼児教育としての英語をめぐる環境とその指導のあり方について」『紀要』第38輯、つくば国際短期大学、平成22年、43-58頁参照。
- ⁷⁾ 松永道子、小松義隆、ルーク・ロバージュ「コミュニケーション能力を高める幼児英語教育のこれから—幼稚園・保育園における英語教育の全国調査および先進園訪問を通して—」『研究紀要』第21号、長崎短期大学、平成21年、47-62頁参照。
- ⁸⁾ 正木克彦「英語遊びについて」、平成25年4月13日。
- ⁹⁾ 正木克彦「駒方保育園の『英語あそび』」、平成27年3月6日。
- ¹⁰⁾ 本文中においては、原則として「英語あそび」という表記を用いたが、資料中、「英語遊び」と表記されている場合には原文のままとした。
- ¹¹⁾ 前掲註9)。
- ¹²⁾ 正木克彦「Let's Play in English」14-34 13:00～14:00 March 6, 2015」、平成27年3月6日。
- ¹³⁾ 前掲註9)。

